

日本仏教における疑經の受容と生成

落合 俊典

東アジア仏教において疑經と称されるものは釈道安の撰集した「疑經錄」にその初源があるが、それは僧祐の『出三藏記集』に「安公疑經錄」として引用されていることから中国仏教初期の疑經の一様相を窺うことが可能である。

釈道安が疑經と判定した經典の数は、26部30巻であったが、この内1部2巻が日本に現存していることが約20年前に分かった。本書名は『毘羅三昧經』という。毘羅の意味は必ずしも明確ではないが、勇猛ヴィールヤ vīrya であるかも知れない。但し明確な根拠を有しない。そのことから中国で撰述されたという疑經の可能性が有力となるのである。

中国では仏教經典と相似する疑經(偽經)が、その最初期から連綿と撰述され続けてきたが、唐代には遂にその数392部1,055巻にも達したという。歴代の經錄編集者がその無価値なることを喧伝してきたにも係わらず生成されたのである。これが「中国における疑經の生成」状況である。

さて、では日本においては中国の疑經に対してどのような態度が取られたのか、また日本でもどのような状況下で疑經が生成されたのかという問題点が提議されてもよいと考えられる。

それでは日本撰述の疑經は何時から生成されたのであろうか。これまで一般には中世には存したと言われながらも、実際上の確証は江戸時代にとどまり、容易に遡上することが出来なかった。しかし、幾つかの先行研究の進展と相まって、平安時代院政期に書写された七寺一切經中および鎌倉時代書写の青蓮院吉水藏から『大乘毘沙門功德經』が確認されて、一挙にその時期が遡ったのである。

さらに真福寺と身延文庫の『漸誘釈』という文献の写本研究によって、最も古い日本撰述の疑經が明らかになってきた。真福寺本の書写年代は、奥書にある「天曆二年」(948)の記述が紙質・書風から十分に信頼できるものであり、10世紀写本と認められる。

本書は書名が『漸誘釈』とありながらも、内題の下に「玄奘三藏奉 詔訳」とあり、經典の形式を採用している。そしてその内容は仏教教訓的なものの記述に満ちている。一例を挙げれば

…經云、現在甘露、未來鐵丸也。所以往古聖人敗己身以濟他命。割自肉、扶他亡。然花文不鮮。人命不盛。流轉生死猶如電光。

…經に云く、現在の甘露は未來の鐵丸なり。所以に往古の聖人は己が身を敗りて以て他の命を濟えり。自の肉を割きて、他の亡びたるを扶く。然も花の文は鮮かならず。人の命は盛んならず。流轉生死すること猶し電光の如し。

という文言が出てくる。これは『日本靈異記』中巻「己作寺用其寺物作牛役緣第九」にある

…冀无慚愧者△覽乎斯錄△改心行善△寬飢苦所迫雖飲銅湯△而不食寺物△古人說曰△現在甘露未來鐵丸者△其斯謂之歟△誠知△非无因果△不怖慎歟△所以大集經云△盜僧物者△罪過五逆云々

…冀はくは慚愧无き者も、斯の錄を覽て、心を改め善を行はむことを。寧ろ飢苦に迫〔メ〕られテ銅の湯を飲むと雖も、寺の物を食ま不れ。古人の諺ニ曰はく「現在の甘露は未來の鐵丸なり」といふは、其れ斯れを謂ふなり。誠に知る、因果无きに非ざるを。怖り慎まらむや。所以に大集經に云はく「僧の物を盜む者は、罪五逆に過ぐ云々」といへり。

と相似している内容である。『漸誘釈』の直前の文章を省略したが、どちらも因果応報を述べ、罪を犯さないよう喚起しているのである。

以上のように本発表では日本撰述疑經の内、最も古いと想定される『漸誘釈』を取り上げ、受容と生成について論じていきたいと考えている。(了)